

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

言語文化研究室
藤田尊潮教授

『人間の土地 改版 (新潮文庫)』

サン＝テグジュペリ [著]，
堀口大學 訳，新潮社，1998

(先生が紹介しているのは、新潮文庫 1955 年版。)



「空飛ぶ小説家」サン＝テグジュペリの 1938 年の作品。フランス・アカデミー小説大賞を受賞した作品は、実は内容はフィクションではなく、ドキュメンタリーである。この本はアメリカでもすぐに翻訳されベストセラーとなった。パイロットとして世界中を飛びまわり、その体験をもとに作家として数々の優れた作品を生み出したサン＝テグジュペリの「人間」についての深い洞察が、全編を通してあふれ出している。特にリビア砂漠に不時着したときの遭難体験を綴った「砂漠のただ中で」は生か死かの極限状況の中で「他者」との出会い、「人間」とはなにかという問いに対するサン＝テグジュペリ自身の解答である。彼は書く、「わたしたちを救ったリビアのベドウィン人よ、おまえはわたしの記憶から永久に消え去るだろう。わたしはおまえの顔を決して思い出さないだろう。おまえは『人間というもの』だ。おまえは同時にすべての人間の顔をしてわたしに現れる。[...]わたしはおまえをすべての人間の中に見出すだろう」(筆者訳)。この体験は『星の王子さま』という最後の作品の中でポエティックに結晶することになった。サン＝テグジュペリの文体は豊富な比喩表現というよりは、むしろ繰り返しの多さにこそ特徴がある。悪文すれすれの反復を繰り返しながら、サン＝テグジュペリの文章は読者を飽きさせず、逆に強烈な強さで打つ。

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

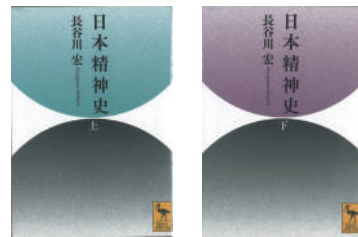
Recommended books for art students.

言語文化研究室
藤田尊潮教授

『日本精神史 上（講談社学術文庫；2785）、 下（講談社学術文庫；2786）』

長谷川宏 [著]，講談社，2023

（先生が紹介しているのは、講談社 2015 年版。）



『日本文学史序説 上、下』

加藤周一 著，筑摩書房，

（上）1975、（下）1980

（先生が紹介しているのは、1999 年版。）



『日本精神史』、本書はプレゼントに最適な本である。ドイツ留学中の学生が、日本に一時帰国したおりに、本書を読んでいたことを思い出す。日本文化のガイドブックとして、美術作品はもとより、日本の土地で育まれた思想、宗教について考察するために必要不可欠だと考えます。原著の記述は、三内丸山遺跡から始まり、火炎土器と土偶、銅鐸、古墳、仏教の受容へと進み、鶴屋南北『東海道四谷怪談』で幕を閉じる。

あわせて昭和時代の画期的な文学史である、加藤周一『日本文学史序説』を読むことで日本文学の大きな流れを理解することが出来るだろう。こちらで論じられているのも、日本の文化と思想である。今現在を担い、これから未来を構築することになる若者たちに両書は過去からの贈り物になるだろうと心から思う。

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

言語文化研究室
藤田尊潮教授

『永山則夫：封印された鑑定記録』

津田塾大学所蔵



堀川恵子 著，岩波書店，2013

(先生が紹介しているのは、講談社 2017 年版。)

当館所蔵なし 国際基督教大学、津田塾大学、東京経済大学にあり

『正田昭・黙想ノート』

正田昭 著ほか，みすず書房，1967



2024 年 9 月袴田巖さんの無罪確定、1966 年の事件から 58 年を経ている。無実の人を死刑囚として扱ってきた事実があっても、未だ死刑廃止の声は高まらないようである。永山則夫は 1968 年に連続殺人事件を起こし、1977 年に死刑に処された。『永山則夫 封印された鑑定記録』の中の彼は、石川義博さんという鑑定医のもとで人間性を取り戻し、人間として成長しているように見える。

正田昭は 1953 年に殺人事件を起こし、1969 年に死刑に処された。作家・医師で彼と交流のあった加賀乙彦は、獄中でカトリックの信者となった彼から信仰を教えられたと語っている。わたしの所有する『正田昭 黙想ノート』は 45 年間いるも本棚のよく見えるところに置いてある。古びた背表紙だが、わたしの目には光を放っているかのように感じられる。この本が本棚の一隅にあることは、希望を見つけることの助けになるかのような。人間はなぜ「罪」を犯すのか、「罪」の「ゆるし」とはなにか。人生を生きることの意味は。わたしにとって「他者」とはだれなのか。

また二人の死刑囚を知ることは、死刑制度そのものについて考えることにつながるはずである。死刑制度を支えているのは、他でもないこのわたし自身だと気付くことに意味があるのだ。